

教員としての更なる資質向上としての「道徳・特活研修」

この週末は仙台育英の「9回裏奇跡の逆転」に感激しました。まさに、野球は2アウトから、そして筋書きのないドラマです。その試合後、解説の渡辺元智さん（前横浜高校監督）の「最近はできないことをできるようにする指導が少なくなっている。楽しいことを求めるのも大切だが、今日の試合では、改めて高校野球で何が大切かを教えられた」というコメントも私は印象的でした。

さて、ここから10月までは先生方にとって繁忙期。教育実習、運動会、そして1学期末の通信票作成と続いていきます。

以前はこの時期（9月1週目）に「教職経験5年経過研修（当時：宮城県教育センター主催）」の会場として、各学年道徳・特活（学級会）各1コマの授業公開をしていました（ちょっとした公開研究会です）。7月中に授業者を決定し、部内授業を行い、当日を迎えます。（当時は夏休み明けには「校園球技大会（野球・ソフト・バレーなど）も学校園対抗で実施していました）。

なぜ「道徳・特活」なのか。これは宮城県で定めている教員のライフステージに応じて身につけさせたい資質・能力に関係しています。宮城県教員研修マスタープランには教職6年目～10年目を資質成長期として「学級担任、教科主任等としての経験をもとに、学習指導はもとより、学級経営・学年経営・生徒指導等の在り方に関して広い視野に立った力量を向上させる時期、とあります。初任から5年が経過し、ある程度の指導ができるようになった教員にとって「道徳・特活」はまさに学級担任としてのさらなる力量アップには欠かせない分野なのです。

小学校で学級経営の根幹は道徳・特活にあります。毎週この2時間を誠実に行うことが学級の質を高め、ひいては教科の研究の充実にもつながります。かつて先輩から、「どんなにすばらしい種（研究）を蒔いても、畑（学級）が肥えていなければ花は咲かない」と教えていただいたことがあります。道徳や特活が大切なのは附属小だけではなく、他の小学校も同じです。今、学級や子どもたちが抱えている問題もこの2時間を子どもたちときちんと行うことで随分解決に向かうのではないのでしょうか。なぜなら、道徳・特活には子どもたちの心を鍛えたり揺さぶったりさらには豊かにしたりする要素がたくさん入っているからです。

今日から学校に子どもたちの元気な歓声と明るい笑顔が戻ってきました。全校集会での子どもたちの様子を見て、改めて学校は子どもたちが主役であることを実感しました。今週末にはこのすっきりしない天気からも開放されそうです。行事や授業を通して、子どもたちと先生方がどんなドラマをつくってくれるのか、とても楽しみになりました。

（文責：副校長 手代木）